

〔新刊紹介〕

柴崎茂光編著『林業遺産へ行こう 自然の力を活かす、昔の知恵を再発見』

栗 原 健 一

日本森林学会は、学会設立一〇〇周年を記念して二〇一三年度に林業遺産選定制度を開始し、二〇二三年度までに五一か所の林業遺産を認定している。制度開始から一〇年以上が経過し、現在の林業遺産をあらためて紹介したのが本書であろう。

林業遺産とは何か。本書では、林業を「山とのかかわりを持ちながら、木材・薪炭材・動植物・楽しみ（畏れ）といった山からのさまざまな恵みを受ける活動や、山地災害を軽減させるために行う活動」（一八頁）とし、林業遺産とは、林業活動を通じて「地域の歴史の中で何らかの意味を有する有形物または無形物」（一八頁）と定義している。

その上で、林業遺産を次のように六つに分類している。すなわち、林業跡地・搬出関係・建造物（森林鉄道・軌道、林道、筏場、木馬道、炭焼き窯、造林小屋、事務所、初期の砂防関連施設など）、道具類・資料群（林業用具、古文書、近代資料、施業計画、写真、映像など）、林業技術・造林・育林・集材・運材・加工技術、特用林産の生産技術など）、林業関連の信仰習俗（山の神祭り、木挽き唄、山岳聖地の参詣など）、林業発祥地・記念地（林業の発祥地、記念植樹地、入会

林野などの旧係争地など）、林業景観（地域の風土を特徴づける用材・薪炭・特用林産物生産林、防災林、里山林など）である。

なお、林業遺産の認定は、①日本森林学会の学会員が遺産候補を推薦、②林業遺産選定委員会で審査、③学会理事会が承認、という手続きで行われている。学会員でない人でも、学会の林業遺産地区推薦委員に依頼すれば、推薦の代行してもらえするという。

本稿では、本書の構成を確認の上、内容を紹介し、最後に筆者の若干の感想を記してみたい。

一 本書の構成

まず、本書の目次を示して構成を確認しよう。

はじめに（柴崎茂光氏）

林業遺産が語ること

林業遺産ってなんだろう（柴崎茂光氏）／良材をつくる（深町加津枝

柴崎茂光編著『林業遺産へ行こう 自然の力を活かす、昔の知恵を再発見』

氏)／木を伐る(柴崎茂光氏)／木を運ぶ(奥山洋一郎・柴崎茂光氏)
／森林鉄道(武田泉氏)／森の恵み―6つの「りょう」(奥敬一氏)／
森を使ってくらしを守る(八巻一成氏)／信仰の場から観光の場へ

(柴崎茂光氏)

林業遺産を見に行こう

【茨城県つくば市】

筑波山内に全国植樹祭発祥の地を求めて(八巻一成氏)

【埼玉県南部・東京都23区西側】

一日乗車券で富士登山！武蔵國富士塚巡拝(柴崎茂光氏)

【京都市北区中川北山町ほか】

京都市内から文化人が愛した美しい杉林の里へ(深町加津枝氏)

【北海道札幌市ほか】

札幌周辺の隠れた林業遺産探訪ウォーク(八巻一成氏)

【福岡県八女市矢部村】

福岡市内から日帰りで訪ねる柚の里(奥山洋一郎氏)

【山形県酒田市・鶴岡市周辺】

庄内地方に林業遺産候補を訪ねる(林雅秀氏)

【栃木県日光市】

山の災害とともにくらしした日光・足尾(柴崎茂光氏)

【滋賀県東近江市】

日本の木工文化を支えた木地師の里へ(深町加津枝氏)

【兵庫県川西市・大阪府能勢町】

菊炭生産の里山がはぐくむ生物多様性(深町加津枝氏)

【高知県安芸郡(魚梁瀬地区)】

重要文化財の鉄道遺構が点在！天空の郷へ(奥山洋一郎氏)

【北海道旭川市・稚内市】

最北端への鉄路宗谷本線 鈍行乗りつぶし(武田泉氏)

【長野県大桑村、上松町、王滝村、木曾町】

旧中山道の宿場に見る近代林政の足跡(奥敬一氏)

【長野県飯田市】

南アルプスの麓で味わう山村文化(竹本太郎氏)

【鳥取県三朝町、智頭町、鳥取市】

信仰、木材生産、森林セラピー。森の恵みを体験(柴崎茂光氏)

【北海道 大雪山周辺と道東地域】

天然林と人工林の風景を楽しむドライブ三昧(八巻一成氏)

【鹿児島県屋久島町】

森に還っていく軌道の跡に歴史の流れを見る(柴崎茂光氏)

【青森県北部・秋田県中部】

秋田・青森 東北林鉄弾丸ツアー考(柴崎茂光・武田泉氏)

コラム

日本森林学会選定林業遺産一覧

まだまだあるぞ！全国の林業遺産

主な参考文献／執筆者紹介

本書は、「林業遺産が語ること」と「林業遺産を見に行こう」の二部構成である。各内容の間に関連したコラム一七本が配置されている。

二 内容の整理

次に、本書の内容をみてみよう。

まず「林業遺産が語ること」では、テーマ解説編として林業をめぐる成木、伐木、運材という木材生産から森の諸機能、信仰・観光というテーマまでさまざまな解説がなされている。

「林業遺産ってなんだろう」では、プチ日本林業史として、江戸時代以前を「採取から育成へ」、明治時代～第二次大戦を「儲かる産業」、敗戦～現代を「価格高騰が招いた衰退」と時代区分しながらまとめている。そして、あらためて本書では林業を幅広くとらえるとして、エコツーリズム、グリーンツーリズム、森林セラピーといった新しい産業も林業の一部と考えるとしている。

「良材をつくる」では、木材を使う場合、「適材適所」で良材を用いることが重要であり、それに合った需要に合わせて各地で木材生産の技術が磨かれてきたとする。そのような良材の産地から京都府の「北山林業」と奈良県の「吉野林業」を紹介している。北山林業では台杉仕立という生産技術、吉野林業では「山守制度」という独自の経営システムなどについて取り上げる。

「木を伐る」では、木を木材や燃料として利用する場合、最初に行う作業は伐採であるとし、木を倒し、運び出しやすいように、枝を払い、樹皮をはぎ、適切な長さ・形に加工する（造材作業）。その伐採技術の歴史として、古代～中世、中世期終わり～江戸時代、近代～現代という時代区分のもとにまとめる。その後、江戸時代後期の木曾や飛騨地方で行われていた伐

木・運材技術を明治期に絵巻にした「木曾式伐木運材図会」を取り上げ、山の神への祈りを紹介する。

「木を運ぶ」では、切り出した木材を利用するには、森林内から運び出す必要があるとする。川を利用した木材流送、木材を乗せて運ぶ木櫃（木馬）と専用の運搬路の木馬道のセットで木材を運ぶ木馬、森林内の伐採地から集積地まで丸太を樋のような形に組んだすべり台を設置して木材をすべり落とす修羅、雪の積もった季節に利用する橇について概説する。

「森林鉄道」では、木材運搬用の林業用産業鉄道を取り上げる。近世以前の木材搬出方法には、木材の損傷、天候や川の水量などの問題があり、近代になると電源開発用のダム建設などが行われたため、明治時代以降に森林鉄道が導入された。国内初の森林鉄道は一九〇一年（明治三四）の阿寺軽便鉄道（長野県）などとされているが、木材輸送目的で動力車が牽引する本格的なものは、一九〇八年（明治四二）の津軽森林鉄道としている。その後、長野県木曾や高知県魚梁瀬など、全国各地の林業地帯でさまざまな森林鉄道が建設されたが、森林資源の枯渇やトラック輸送の機動性向上などにより、一九六〇年代以降急速に廃止されていき、一九七五年（昭和五〇）に木曾小川森林鉄道が廃止され、森林鉄道は終焉した。森林鉄道の栄枯盛衰がまとめられる。

「森の恵み―六つの「りよう」」では、物質的に消費できる「恵み」として、「燃料」「材料」「食料」「肥料」「飼料」「狩猟」の六つに整理する。燃料では薪・柴・木炭など、材料では、建築材としての利用、日常の道具としての利用、繊維や樹皮の活用、漆・染料・樟脳という化学成分の活用を取り上げる。また食料では、木の実や山菜の採集、焼き畑など森林内の空間で作物栽培、採集・半栽培・栽培、生薬を紹介する。肥料・飼料では刈

敷・草木灰、稗などを挙げ、狩猟では東北地方山間部の豪雪地帯で狩猟を行う集団のマガギ、獣害駆除などについて取り上げる。

「森を使つてくらしを守る」では、森林の樹木が人々の生活に役立っているとし、森林の公益的機能を、土砂災害防止・土壌保全機能、水源涵養機能、地球環境保全機能、快適環境形成機能、生物多様性保全機能、保健・レクリエーション機能、文化機能というさまざまな機能にまとめる。

「信仰の場から観光の場へ」では、山は大きな恵みと同時に災いをもたらす人智を超えた存在として、また祖先が見守る場として、人々が畏れ崇める信仰の対象となってきたとする。歴史的な霊場、修験道、江戸時代以降の観光インフラと講を紹介する。明治の開国以降、登山文化が持ち込まれ、一九三一年(昭和六)に国立公園制度が誕生すると観光化が進む一方で、近年でも生活に根ざした山の信仰が残っているとまとめる。

続いて「林業遺産を見に行こう」では、コースガイド編として林業遺産を巡る一七の探索コースが研究者から紹介されている。詳しいコースについては、紙面の都合上紹介しきれないが、各コースの探索スポットをいくつか列記してみよう。

茨城県つくば市の「全国緑化事業発祥之地」記念碑、埼玉県和光市の熊野神社「白子富士」・東京都豊島区の富士浅間神社「長崎富士塚」などの富士塚、京都市北山町の北山大台杉、北海道札幌市の円山公園・江別市の野幌森林公園、福岡県八女市矢部村の杣のふるさと文化館、山形県酒田市の庄内海岸林・鶴岡市の羽黒山、栃木県日光市の砂防堰堤群・足尾市の本山製錬所跡、滋賀県東近江市の筒井神社・木地師資料館、兵庫県川西市の今西農園、大阪府能勢町の能勢さとやま創造館、高知県安芸郡の魚梁瀬森林鉄道遺構、北海道旭川市・稚内市の鉄道林、長野県大桑村の阿寺溪谷・

上松町の赤沢自然休養林・王滝村の森林鉄道遺構・木曽町の木曽山林資料館、長野県飯田市の遠山森林鉄道遺構、鳥取県三朝町の三朝温泉・智頭町の沖ノ山林鉄軌道跡の森林セラピロード、北海道大雪山周辺の東京大学北海道演習林・遠軽町の丸瀬布森林公園いこいの森、鹿児島県屋久島の屋久杉と安房森林鉄道、青森県の津軽森林鉄道遺構、秋田県の仁別森林鉄道遺構というスポットを挙げてみたが、これは一部に留まるものであるので、詳しくは本書を紐解いてほしい。

「林業遺産を見に行こう」では、各記事において認定されている林業遺産がメモされ、詳しいコースガイドも紹介されており、実際に林業遺産へ行くにあたり大変参考になるだろう。各スポットのカラー写真も掲載され、旅気分を味わうこともできる。スポットについては、QRコードが付されているものもあり、詳しい情報をさらに追うこともできて大変有り難い。

それから、コラムは、「時を刻む木」(上野祥史氏)、「京都北山杉の里総合センター」(深町加津枝氏)、「たたら製鉄と林業」(柴崎茂光氏)、「戦争と森林」(森林道場) (柴崎茂光氏)、「森林鉄道の基礎知識」(武田泉氏)、「インクライン」(柴崎茂光氏)、「植林の歴史を語る」(植林碑) (竹本太郎氏)、「保安林制度」(八巻一成氏)、「林学の歴史をたどる」(平野悠一郎氏)、「門前町の逆転層」(八巻一成氏)、「山開き」(柴崎茂光氏)、「冬の寄り道」(JR目黒駅周辺の富士見坂) (柴崎茂光氏)、「植樹ボランティア体験記」(柴崎茂光氏)、「鉾毒問題と渡良瀬遊水地」(柴崎茂光氏)、「霜月祭」(竹本太郎氏)、「オホーツク地域で隆盛を極めた林業の町」(八巻一成氏)、「林業に関する文書」(柴崎茂光氏)という一七本が各所に掲載されている。

三 若干の感想

林業遺産については、本書を読んではじめて詳しく知ることができた。

近年は、世界遺産・日本遺産をはじめ、世界かんがい施設遺産、土木遺産など、さまざまな遺産が認定されており、それらとの連携や棲み分けなどの点が気になった。一方で、日本では文化財保護法にもとづく文化財指定とその保護行政が行われ、文化財保存活用地域計画を進めている自治体も多くなってきた。それらとの連携や棲み分けも考える必要があるだろう。しかし、要は現在遺されている遺産とされるものをつとにかく後世に遺していくことというところだろう。遺産や文化財として、さまざまな認定・指定をしていくことで、遺していければよいと考える。そのためには、遺産をめぐる研究活動と普及活動が不可欠であり、本書は林業遺産におけるその役割を果たしている。

また本書を読んで、他産業以上に林業において歴史という要素がきわめて重要であることをあらためて感じた。その意味でも林業遺産について考えることは大きな意味があるだろう。

本書は、林業遺産を知る上で必読書である。どこからでも読みやすい構成となっており、コラムも充実している。林業史に関係する研究者にとっても、全国各地に多くの林業遺産があり、さまざまな事例を学ぶきっかけを与えてくれる本であろう。さまざまな立場の方々が本書を手に取り、林業遺産がさらに知られていくことを期待したい。読了後には本書を持って、各地の林業遺産を巡ってみてはいかがだろうか。

（文一総合出版、二〇二五年五月刊、A五版、二四八頁、三、三〇〇円＋税）

柴崎茂光編著『林業遺産へ行く』 自然の力を活かす、昔の知恵を再発見

